



柔道龍虎房(柔道龍虎榜 / Throw Down)

2006(平成18)年4月28日鑑賞(PLANET+1 試写室)

監督=杜琪峰^{ジョニー・トー} / 出演=古天樂^{ルイス・クワン} / 郭富城^{アール・クワン} / チェリー・イン / レオン・カーファイ / カルバン・チョイ (ステップ・バイ・ステップ、デックスエンタテインメント配給 / 2004年香港映画 / 95分)

……これは何とも珍しく、香港の杜琪峰^{ジョニー・トー}監督が、黒澤明監督の『姿三四郎』(43年)にオマージュを捧げるべくつくった、香港の「柔道映画」。といっても、「山嵐」の技が披露されるわけではなく、2人の若き柔道家と、これに絡む歌手志望の若い女性の生き方を描くもの……? 注目すべきは、「網膜色素変性症」の怪(?)と、姿三四郎 vs. 檜垣源之助ばりの、林立する高層ビルをバックとした野外での対決シーン。さあ、こんなオモロイ映画(?)を、あなたはどう評価する……?

君は『姿三四郎』を知っているか……?

富田常雄の小説『姿三四郎』は有名な「柔道小説」だが、今ドキの子は多分誰もこんな小説を読んだことがないだろう……。私が中学生の頃、毎週テレビで観ていたのが『柔道一代』(62年12月スタート)。

これは旧派の「柔術」に対して、新たに「柔道」を編み出していく嘉納治五郎と講道館四天王たちの活躍を描くもの。姿三四郎のモデルとなったのは、この四天王の中の1人西郷四郎だ。

この『柔道一代』に続いて、村田英雄が「人に勝つより 自分に勝てと / 云われた言葉が 胸にしむ / つらい修行と 弱音を吐くな / 月が笑うぞ 三四郎」と主題歌を歌ったテレビドラマ『姿三四郎』がスタートしたのは、1963年11月。私はこのドラマも毎週楽しみに観ていたものだ……。

私の中学時代と柔道

こんな柔道モノのカッコよさに憧れて、「よし、俺も柔道を……」と志して、私が中学3年生から始めたのが柔道。

もっとも、その当時、「進学校」だった愛光学園では正式に柔道部というクラブをつくることはできず、同好会的なものしかダメだったため、わずか7、8名で週2、3回、適当に練習していた程度。それでも、私にとっては結構ハードで、映画・将棋・卓球・柔道と毎日忙しい限り……。

そんな時代に読んだ『姿三四郎』はそりゃ面白かった。柔道の教則本にも、姿三四郎の必殺技「山嵐」の解説が載っていたが、これは背負い投げの変形バージョン(?)で、相手の左襟ではなく、右襟を逆手に掴むとともに、右足をはね上げて投げの大技。小説やテレビでは、何メートルも相手を投げ飛ばすのだが、さてホントにそんなことが……?

美空ひばりの『柔』は……?

『姿三四郎』を書いた富田常雄は、講道館四天王の1人であった富田常次郎の実の息子。彼は『姿三四郎』の他にも、柔道小説『柔』を書いている。この本は、小遣い不足にあえいでいた中高校生時代、古本屋で文庫本しか購入していなかった私が、珍しく出版直後にハードカバー本を購入し、胸を躍らせながら読んだもの。そしてこれもテレビドラマ化されたため、私はこれも毎週楽しみにして観ていたもの。

その主題歌『柔』を歌ったのは美空ひばり。「勝つと思うな 思えば負けよ/負けでもともと この胸の/奥に生きてる 柔の夢が/一生一度を 一生一度を/待っている」と歌ったこの曲は、1965年に見事、日本レコード大賞を受賞した名曲だ。

『姿三四郎』映画いろいろ

姿三四郎を一躍有名にしたのは、黒澤明監督が自ら脚本を書き、監督デビュー作となった映画『姿三四郎』(43年)によるものだったが、それはあくまで、その時代のお話……。

私の中学時代は、この黒澤版・三四郎を観るチャンスはなく、私がこれを観たのは、大学生になって夏休みに帰省した時。何本かの黒澤作品特集の1本として観たものだ。



© 2004 One Hundred Years Of Film Company Limited. All Rights Reserved.

藤田進が姿三四郎となり、その宿命のライバル檜垣源之助には月形龍之介が。そして、講道館を創設した嘉納治五郎のモデルとなった矢野正五郎は、何と大河内伝次郎という俳優陣だった。

また、ほぼ同じ時期に観たのが、加山雄三版『姿三四郎』(65年)。あの当時の加山雄三は、『若大将』シリーズで歌、スポーツ、恋愛、何でもオーケーというカッコいい役を恋人役の星由里子、敵役(?)の青大将こと田中邦衛とともに演じていたが、他方で、この『姿三四郎』や『赤ひげ』(65年)など、たくさんの「文芸作品」にも出演するすばらしい役者だった。

こんな『姿三四郎』は、その後も再三テレビドラマで取り上げられたらしいが、私はそれは全然知らない。ところが、1955年生まれジョニー・トーの杜琪峰監督は、70年代に香港で放映された日本のドラマ『姿三四郎』を観て育ったとのこと。したがって、この『柔道龍虎房』のラストには、「黒澤監督に捧げる」との字幕が……。

ジョニー・トーはじめて知った杜琪峰監督

てなわけで、私はこの『柔道龍虎房』のジョニー・トー杜琪峰監督の名前はこれまで全く知らなかったが、パンフレットを読むと、彼はアクションからコメディ、メロドラマまで何でもござれの多作監督とのこと。そしてまた、「真面目な話、この10年、香港映画はジョニー・トー杜琪峰が背負ってきたといっても過言ではない」「彼が意図的に香港映画を守ってきたのは彼がハリウッドからの誘いを断り続けていることから明白だ」とのこと。

さて、そんなジョニー・トー杜琪峰監督が、なぜ今、「柔道」をテーマとして、どんな映画を撮ろうとしたのだろうか……? そこに登場するのは3人の若き主人公たちだが、各自それぞれ曰く因縁が……。さてそんな3人に、どんな物語が待ち受けているのだろう

か……？

なかなか再起できない主人公、シト・ポウ

この映画のポイントは、かつて柔道界で「柔道小金剛」とまで呼ばれながら、今は酒場の雇われマスター兼バンドリーダーとしてギターを弾きながら、酒におぼれ、借金に追われる自堕落な生活を送っているシト・ポウ（古天樂^{ルイス・クー}）の人物像。彼はなぜ突然柔道を辞めてしまったのか？ そして、いつ再起するのか？ という疑問（テーマ）を観客に提示することによって、この映画の物語をつくっていくわけだが、実はこの映画ではこの導入部と展開部（？）が非常に長い。つまり、いつ酒をやめるのか？ いつバクチから足を洗うのか？ いつ柔道への熱き思いを取り戻すのか……？ これについて、観客は長い時間、待たされることに……。

それにしても、シトは実によく酒を飲む。というより、こりゃ完全なアルコール依存症という状態……。したがって、歌手としてもよく知られているという香港のイケメン俳優、古天樂もほとんどのシーンがあまりカッコいい役とは言えないもの……？

トニーはちょっと単細胞……？

他方、シトに対して柔道の勝負をしたいとわざわざ酒場まで出向いてきたのが、トニー（郭富城^{アーロン・ウォック}）。彼はどんな仕事をして生きているのかなど、トニーの身上は映画からは全くわからないが、私が観る限り、このトニーはわりと単細胞……。

アルコール浸りになっているシトを相手にしたのでは、圧倒的にトニーの方が強いのは当然。何回も真剣に勝負をしると申し入れるのだが、シトは終始曖昧な態度。ところが、そんな2人の間に奇妙な「友情」が芽生えてきたから人間は面白い……。

このトニーは、シトの現役時代のライバルであったレイ・アコン（レオン・カープアイ）と出会ったため、レイに対しても勝負を挑んだが見事に完敗。ところが、この勝負で左腕を脱臼したトニーは、新たに右腕だけで相手を投げる技を編み出した、というから面白い。しかし、杜琪峰監督って、ホントに何でもありだね……。

あくまで前向きなヒロイン、シウモン

こんな男の世界に1人絡んでくる美しいヒロインが歌手志望のシウモン（チェリー・イン）。シウモンが最初に登場するのは、家賃不払いのため部屋を追い出される



© 2004 One Hundred Years Of Film Company Limited. All Rights Reserved.

シーン。

家賃を何度も滞納し、支払うという約束を再三破り、手渡した小切手は不渡りとし、これで支払うと言って渡した指輪はおもちゃ……。こんな状態では、家主のおばさんがシウモンに対して怒るのは当たり前。

わずかばかりの荷物を部屋の外に放り出されたシウモンは、それでもなお強気で、荷物を拾った後の捨てゼリフは「くそババア……」。そんなシウモンが、歌手として雇ってくれと入っていったのがシトのいる酒場。さて、彼女はシトとトニーとの対決にどのように絡んでいくのだろうか……。そして、彼女の歌手になりたいという夢は実現するのだろうか……？

このシウモンは、^{ジョニー・トー}杜琪峰監督のお気に入りのミュージズとのこと。さて、そのベッピンぶりは……？

トニーが勝負をしたがるワケは……？

シトやレイに対して、執拗に「勝負をしてくれ」と申し出るトニーに対して、誰もが抱く疑問は、「なぜそんなに勝負にこだわるのか？」ということ。それに対するトニーの答えは、「俺は目の病気だ。網膜色素変性症だから、徐々に視力を失い、近いうちに失明する」というもの。

こう聞けば「なるほど」と思うとともに、何とも複雑な気持ちになってくるのが人情というもの。

ところが、ある日トニーは「あれはウソだよ。ああ言えば誰でも真剣に受け止めてくれるから……」とシャーシャーと言い放った。すると、なぜかそれを傍で聞いていたシトが怒りだし、トニーに対して掴みかかっていったから、そこで一騒動が……。

もっとも、酒びたりのシトだったから、ここで急に本気になって怒っても、トニーを倒すことはできなかったが、トニーのそんな言葉を聞いて、シトが怒ったのはなぜ……？ その答えが、ラストのクライマックスに向かって少しずつ……。

網膜色素変性症とは……？

網膜色素変性症というセリフが出てきたためビックリしたのは私。というのは、私ゴトながら、ここ2、3カ月左目の視力が落ちてきたナと自覚していた私は、脳腫瘍、アルツハイマー疾患、白内障……などと思い悩み(?)、つい最近かかりつけの医師の紹介を得て、MRI検査と眼科の診察を受けたところ。そしてMRIは事なきを得たが、高血圧の管理が不十分だったことを指摘された。さらに、眼科においては、「網膜裂孔」の疑いを指摘され、「レーザー治療か、場合によっては手術も」と「宣告」され、この映画を観た前日には、大きな病院で精密検査を受けたところ。

入院確実と覚悟して診察に臨んだ私だったが、結果は99.9%予想していなかった「大丈夫です。老化現象に過ぎず、病気といえるものではありません」というありがたいお言葉を頂くことに……。

それまでは網膜剥離、網膜裂孔、網膜色素変性症などという言葉は自分に全く無関係なものと思っていたが、急にわが身のこととなり、「視力が徐々に落ちていき、やがて失明するのでは……」などとここ数日頭のどこかで考えていただけに、このトニーのセリフにはビックリ!

そして、それが「真っ赤なウソだ」とシャーシャーと話しているのを聞くと、「おい、ちょっと待てよ。そんな悪い冗談を言えば、本当の病気の人はどう思うんだ!」と言ってやりたくなかったのは、私が本気で悩んでいたため。するとシトが、トニーに対して急に怒った理由もひょっとして……？

宿命のライバル檜垣との闘いは……？

この映画のクライマックスは、やっど昔の柔道への熱い思いを取り戻し、トニーとともに練習に励むシトが、かつての宿命のライバル、レイと対決するシーン。三四郎と檜垣の対決シーンは『姿三四郎』映画最大の見せ場だが、その勝負は畳の上ではなく、野外戦。

日本は山が多い国だから、そんな2人の勝負に適した荒野(草地)はいっぱいある

が、狭い国土に高層ビルが林立している香港では、そんな場所はまず存在しないはず。しかし、さすが杜琪峰監督。映画の冒頭に高層ビルの谷間にある草地を観客に観せて、2人の対決場所を暗示していたとおり、クライマックスはこの草地でのシトとレイの対決。

しかし、トニーを立会人としたこの勝負において、レイはなぜか目を布で巻いて、何も見えない状態でシトと対決。さて、このココロは……？そして、その対決の結果は……？

何でもありの杜琪峰監督のことだから、ひょっとして姿三四郎の必殺技「山嵐」が登場するのかも……？

『姿三四郎』の歌を歌うのは……？

この映画には、シトの師匠チェン・ヤッサム（ロー・ホイパン）の息子チン（カルバン・チョイ）という奇妙なキャラの男が登場する。彼は食事の時いつも、ジュースをストローでブクブクと泡立てているため、師匠から「やめなさい」と怒られているし、しゃべるセリフは「僕が姿三四郎、君が檜垣」というだけだから、ヘンな奴だなと思っていたが、師匠が柔道大会で敗退して死亡した後、見えてくる彼の実態は……？

そんなチンが映画の冒頭、中間点そしてラストの3度にわたって歌うのが、1970年の日本テレビ放映版の『姿三四郎』の主題歌。

もちろん、私は1度も聴いたことのない曲だが、これを中国語ではなく、日本語で歌っているから驚き。ホントに香港の人たちって、こんな日本語の歌を懐かしく思い出すことができるの……？



© 2004 One Hundred Years Of Film Company Limited. All Rights Reserved.

2006(平成18)年4月29日記